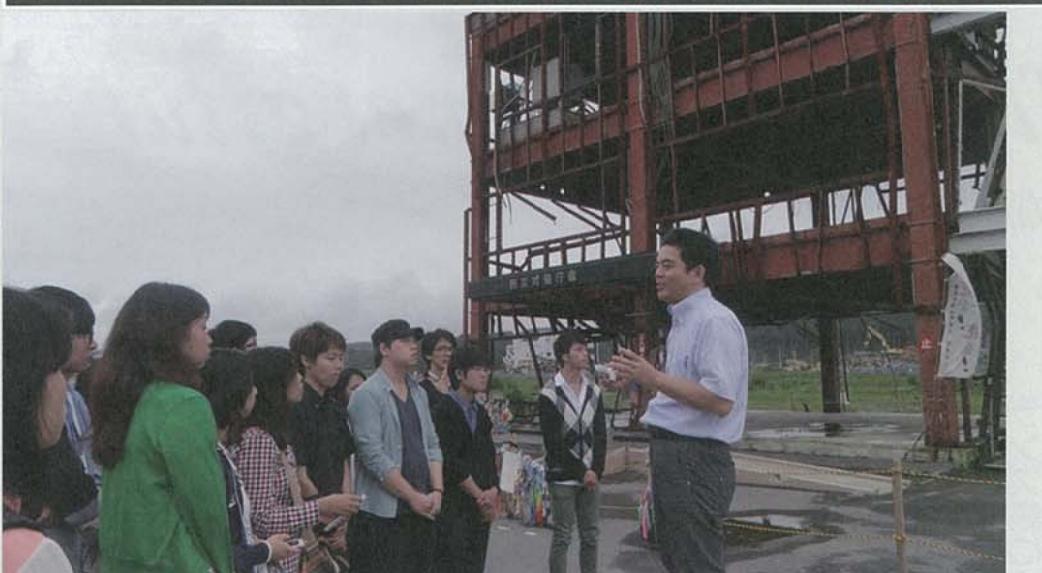


解体前の南三陸防災庁舎を訪問



2013年7月31日からの5日間、東北大震災の被災地を訪れた。被災地の今を知る為に現地の方々の声に耳を傾けた。本紙は活動内容も含め、その小窓を掲載していく。

東北訪問新聞

2013年11月1日
編集長：吉積皓平

8月1日、宮城県南三陸町にある防災対策庁舎を訪れた。東日本大震災の津波で骨組みだけが残り、津波の猛威を伝える震災遺構（震災の記憶を遺す構造物）となつた本庁舎に多くの人々が足を運んでいた。実物の庁舎を目前とした時の心境は、決して容易には語り得ないものがある。被害規模については立命館大学で講義を受け予め知つてはいたが、庁舎を前にした時は日中韓学生の全員が自然と沈黙した。慰靈のために手を合わせる人が献花台の前にならび、被災地ボランティアの津波の体験を熱心に耳を傾ける様子が印象的であった。庁舎を前にした時の気持ちを韓国人学生のメン・ハンジエ君はこう語る。「実物を目に見て悲しみがあふれ、いて

東北プログラムスケジュール

7月31日	夕方:京都を出発
8月1日	早朝:石巻到着 午前:戸倉中学校、南三陸町さんさん商店街 午後:跡などを見学。学生意見交換会
8月2日	午前:石巻市雲雀野地区、門脇小学校、日和山を見学 午後:市民による講演、雄勝町にて避難所運営体験ゲーム
8月3日	午前:大船渡市へ移動 午後:大船渡市役所にて行政職員による講演。 学生意見交換会。
8月4日	早朝:大船渡市を出発。夜、京都に到着

地の現状を自分で見て、感心したり、また、多くを教わる。たゞ、地の恐ろしさや復興の現状の厳しさも、それだけは、上に現れる。しかし、それ以上に被災した地の現状を多く教わる。たゞ、地の現状を自分で見て、感心したり、また、多くを教わる。たゞ、地の恐ろしさや復興の現状の厳しさも、それだけは、上に現れる。しかし、それ以上に被災した地の現状を多く教わる。

経ち、私たちは韓国で忙しく過ごしているため、残念ですが被災地復興支援のことを改めて考える時間がありません。でも出会った方々が教えてくれた「家族の大切さ」は今でも思い出します。被災地を訪問した一人として、日々を過ごしていくことが大事だと思います。

も立っても居られず手を合わせました」 庁舎を前にしての学生の表情は一様に硬かつたが、建物の裏側に回つたり写真を撮つたり対応は様々だつた。津波の力で曲がった非常階段、1枚も残らない窓、海水で錆びた鉄柱。写真では確認できなかつた所が私たちに震災を追体験させた。東北大震災への向き合い方に変化が起きた訪問だった。

あれから2ヶ月が経つた9月下旬、南三陸町は同庁舎の保存を断念する意向を固めた。11月に解体が始まる。解体撤去

東北訪問から

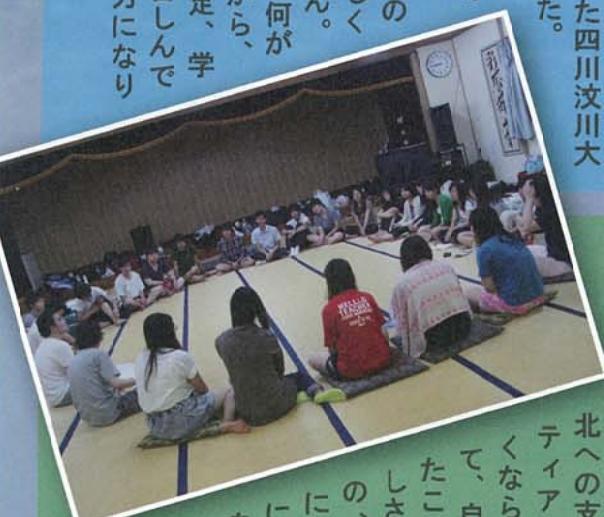
に伝えるのか
題として残さ
は震災記録施
用される予定

方々の笑顔と強さが印象に残りました。

8月4日午前、私たちが東北から京都へ帰る途中、宮城県で震度5の地震が発生しました。被災地で出会った方々の笑顔や声色がよぎり、今の地震で怖がつてないかと心配しました。東北からただただ離れていくバスの中で複雑な気持ちになりました。また今年の夏は、日本各地で記録的豪雨が続き、東北の豪雨被害を聞いた時も宮城県の事が一番初めに頭に浮かびました。

北訪問最終日、学生全員ひとりひとりが4日間の感想を述べた。自分の心を言葉にして、仲間の心の言葉と交換しあった。

市の夏祭りの様子を見たりして
がいっぱいになりました。研修
後日、立根地区公民館でミーテ
ンスが行われました。日中韓の
生が今回の活動を感じた事を思
いに話し合いました。東北に
る以前、新聞やネットの情報だ
に頼っていた私は、復旧は大体
わっていると思っていましたが
地の現状はその考え方をすぐ打ち
しました。被災地ガイドさんの
を聞いていると、津波が目の前
で迫つてくるようでした。私た
は一体東北の人々のために何が
きるのかー、言葉を詰まらせ涙
こらえきれない学生もいました
私は08年に発生した四川汶川
震災を思い出しました。



A composite image consisting of two parts. The left part shows a group of children sitting cross-legged on the floor in a classroom, facing away from the camera. The right part is a close-up of a person's face, showing a single tear falling down their cheek.

がみるみる拡大していく事に驚きを隠せませんでした。私も「自分に何ができるのか」と思ったことがあります。が、ニュースが減るにつれ東北を考える事が少なくなりました。今回、初めて被災地を訪れました。被災者の方が自らガイドになり震災時の様子を話して下さいました。今まで見て聞いて知っていた事とは違い、顔の表情と生の声を通したため心に届きました。今まではなんというか脳に届いていたって感じです。山を登り、津波から逃がれ、家族の連絡を待った人が揺れるバスにしつかり立ち、マイクを握る姿は強く見え、ひとつひとつの言葉が肌に沁みこんでくるようでした。

被災地を思いながら

東北で知つたもの

東北に負けない気持ち

日本人学生 近藤健

本誌は、宮城県でご協力いただいた復興ボランティア団体や大船渡市役所の皆様のご協力により作成する事ができました。本当にありがとうございました。



避難経路を 実際に体験して 8月2日、石巻市の被災地を訪れた。津波に流された街並み、未だ積まれたままの廃車、倒れた墓石。津波の高さは想像をはるかに超えるものだった。津波襲来時に多くの人々が逃げ込んだ日和山上の神社へと続く百段はあるうかという階段を、息を切らしながら登った。避難路となつたその階段は、子供からお年寄りまでが登つたとは思えないほど段差がきつかった。頂上で町を見つめた時の気持ちはどうだったのか。津波に流されていく町を想像してただただ心が痛くなつた。

私達は石巻市にある工場で働くふたりの女性に会う事ができた。ひとりは中学校に通う息子を持つ日本人女性である。震災後、避難所で感じたやるせなさから、後にボランティア団体を興し、パンフレット『石巻に恋しちやつた』を発行し、町の復興活動に役立つ。）、

避難経路を 実際に体験して 8月2日、石巻市の被災地を訪れた。津波に流された街並み、未だ積まれたままの廃車、倒れた墓石。津波の高さは想像をはるかに超えるものだった。津波襲来時に多くの人々が逃げ込んだ日和山上の神社へと続く百段はあるうかという階段を、息を切らしながら登った。避難路となつたその階段は、子供からお年寄りまでが登つたとは思えないほど段差がきつかった。頂上で町を見つめた時の気持ちはどうだったのか。津波に流されていく町を想像してただただ心が痛くなつた。

私達は石巻市にある工場で働くふたりの女性に会う事ができた。ひとりは中学校に通う息子を持つ日本人女性である。震災後、避難所で感じたやるせなさから、後にボランティア団体を興し、パンフレット『石巻に恋しちやつた』を発行し、町の復興活動に役立つ。）、

もうひとりは、一児の母である中国人女性。当時の様子をゆっくりと話し始めた。「私は助かった。でも、日本語の分からぬ中国人が津波警報を理解できずに逃げ遅れた事があった」。大きな傷を胸に抱えた畢竟君さんは本気で中国に帰りたいと考えた。しかし娘に日本にいたいとせがまれ留まる事を決意したという。震災後、まだまだ雪が降るほど冷え込む3月の石巻に来てくれたボランティアの暖かい心が忘れられない。私は娘と日本的心と一緒に生きていいく。そう気づいた時、心にかかつていて雲がぱつと晴れた気持ちになつたという。異国で大地震の恐怖を体験しそのまま現地に残る事は容易ではなかつたはずだ。今後は日本で働く中国人の支えになりたいという。

ふたりは、ここまで来られた原動力を「家族の存在」だと言い切る。当たり前の存在が大きなパワーになる。私達は震災を通して大切なものが見つけられたのか。

被災地訪問3日目、大船渡市役所にて、お話を伺う事ができた。

災害時において行政側は迅速かつ適切な対応が求められる。津波の被害で通信網が途絶えるという大変苦しい状況下で他地域との連絡、物資の確保、更是に復旧に努めなければならぬ。その精一杯の努力にも関わらず住民からの行政当局に対する不満は絶えない。それだけでもストレスは積み重なり心身共には個人として復旧作業ができない点だ。たとえ自宅が流されようが、さらに心を痛める疲労が蓄積していくのが、まさに心を痛めるのは家族が行方不明にならうとそれを理由に公職を離れることができない。家族を優先して助けることができないため、家族から見捨てられたと批判を受けることすらあるという。多くの人がいわゆる行

不手際が報道され、それに対する否定的感情を持ち、その批判に同調した方も多いのではないか。しかし、忘れてはならないのは、行政に携わる人々もひとりの人間であり、自身も被災者のひとりであるということだ。

被災した一般の民間人が混乱し、心に大きな傷を負ったように、行政側もぎりぎりの精神状態と疲労が蓄積した体で全力で対応していることは知つておかなくてはならない。自らの一番大切な犠牲で活動しているのだ。彼らは視点によつては民間人よりも大きな心の傷を背負つていて、よりつらい立場に立つ人々と言えるのだ。

もちろん、彼らの立場を擁護ばかりはできない。しかし、今回の講演を聞いて今まで見てこなかつた立場の人々の意見を聞くことができた。まだまだピックアップされていない様々な立場に立つ人々の思いがあるはずである。

fluctuat nec mergitur

～揺れるが没することはない～

김준엽 キム・ジュニョブ

8月4日、私は石巻市で催している祭りに参加した。韓国人である私にとっては、日本の祭りは興味がある文化の一つだった。まだ復興しきれていない地震被災地で、被災者たちと楽しく祭りに参加することができるかと疑問に感じていたことも確かである。しかし、祭りに参加した後で私の心配は杞憂だったと気づいた。町の人や観光客、ボランティアが共に、楽しんでおり、悲劇的な出来事を乗り越えたいという人々の意思を感じることができた。祭りの目玉はボランティアと市職員、町の人たちが一緒に町を闊歩する盆踊りだつた。楽しく踊る人たちを見ながら、私の心も一緒に楽しくなり、同時に胸が熱くなった。祭りが終わって帰る途中に、私は彼らのように強い心を持つているだろうかとふと思った。その瞬間、彼らのように人生に感謝しながら、痛みを耐え抜くことを知っている強い人になりたいと思った。フランス語にはこんな言葉がある。

“fluctuat nec mergitur”

二三の問題にはこの本が該葉がある